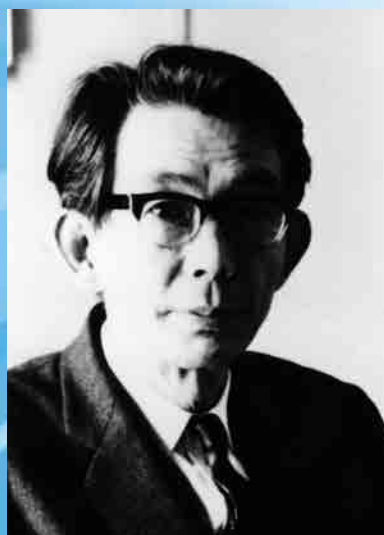


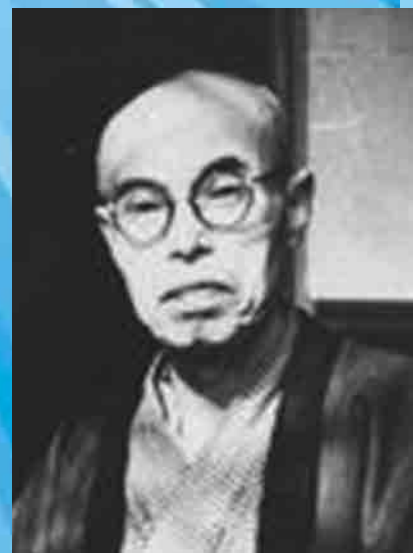


創立者松前重義生誕 120 年・没後 30 年記念

# 創立者松前重義と



# 建学の同志たち



## はじめに

学校法人東海大学の創立者・松前重義は、最晩年、「あなたをして、今日あるをあらしめた最大のものは何だったと思うか」という質問に、ためらうことなく「友情です」と答えました。今日の学園の発展は、松前一人の活動による結果だけではなく、松前の多くの同志、そして各時代の教職員や学生たちの力によってもたらされたのです。

とりわけ、学園創設期の松前の盟友たちは「建学の同志」と呼ばれます。松前の官僚時代の先輩で学園創立構想の発起人にもなった宮本武之輔や梶井剛。松前を常に献身的に支えた篠原登。文理融合を標榜する学園の文系分野を担った足利惇氏。存命中は学園のほぼすべての校地・校舎の設計・建設にあたった山田守。学園解散の危機を救った濱田成徳。松前の郷土の後輩で学園の教育に注力した牧野不二雄。また、望星学塾の大久保眞太郎や、松前の伴侶で「学園の母」と呼ば

れた松前信子、松前の大学時代の恩師抜山平一など、学園の創立・存続・発展に、松前とともに力を尽くした多くの仲間がいました。

今回は、松前重義と建学の同志たちに焦点をあてて、松前の活動と学園史を振り返りながら、松前と建学の同志たちとの出会いや関係性、彼らが今日の学園にどのような役割を果たしたか、どのような理想を胸に学園創設に携わったか、その活躍や松前との友情などについて紹介していきます。



まつまえしげよし  
松前重義  
(1901~1991)

## 序章 幼少期から学生時代

松前重義は熊本県上益城郡大島村（現嘉島町）に生まれ、小学校5年生のとき熊本市に隣接した本庄村（現在は合併し熊本市中央区本荘）に移り住みます。生まれ育った農村と違って、本庄村では夕方になると一斉に電灯がともりました。その新鮮な驚きが、のちに電気工学を学ぶきっかけになったのです。

県立熊本中学校（現県立熊本高等学校）から熊本高等工業学校（現熊本大学工学部）、東北帝国大学（現東北大学）工学部へと進学した松前は、中学時代に兄<sup>あきよし</sup>顕義の影響から始めた柔道などのスポーツに熱中しました。その一方で、大学では卒業研究で電磁気学の権威である抜山平一教授のもと、のちのトランジスタやICへと発展する真空管の特性について研究しました。



熊本県上益城郡大島村の松前重義生家



小学校時代



中学時代（中央）



熊本高等工業学校時代（前列左端）



東北帝大時代（中央上）



## 第1章 就職と聖書研究会、結婚

### ■ 逋信省入省と内村鑑三との出会い

松前は大学卒業後の1925（大正14）年4月、国の事業に携わりたいと、逋信省（現在のNTTおよび日本郵政グループ等）に技官として入省しました。しかし、役所の生活は無味乾燥で事なかれ主義がはびこり、思い悩んだ松前は内村鑑三の聖書研究会に通うようになります。内村は「無教会主義」を唱えたキリスト教思想家・教育者で、松前は内村の思想と人類の救済を説く情熱的な訴えに深く感銘を受けました。

聖書研究会で松前は、プロシアとの戦争に敗れ、疲弊した国を教育によって再興させた近代デンマークの歩みについて学びます。なかでも精神的支柱となったN.F.S. グルントヴィ（1783～1872）と、彼が提唱する国民高等学校（フォルケホイスコーレ）に、教育の理想の姿を見いだしたのです。国民高等学校の教育は、教師と学生が生活をともにし、自由に社会を論じ、哲学を語り合う活気に満ちたものでした。これが松前にとって、生涯を教育に捧げようと決意するきっかけとな

りました。本学の原点がここに 있습니다。

### ■ 森信子との結婚

このころ、松前にはもう一つ大きな出会い、**森信子**との出会いがありました。松前は逋信省で次官を務める上司・桑山鐵雄から、中学1年生の長男の家庭教師を任されていました。この桑山夫人の妹が信子です。信子は1923（大正12）年9月1日の関東大震災の影響で、日本女子大学を2年次で退学していました。そうした折、桑山夫妻が松前を気に入り、信子を紹介する運びとなったのです。

正式に見合いの話が持ち込まれ、同席した松前の義兄・本田傳喜は、信子を大変気に入って松前に結婚を勧めました。1926（大正15）年5月1日、松前と信子は本田が牧師を務める東京・東大久保教会で式を挙げました。結婚の記念に松前が信子に贈ったものは、一冊の聖書でした。信子は一生懸命に聖書を読むようになり、日曜日には松前と一緒に内村の聖書研究会に参加するようになりました。

松前と信子は聖書を座右に置きつつ、ともに人生の苦難を乗り越えていくこととなったのです。

## 第2章 無装荷ケーブルと望星学塾

### ■ 無装荷ケーブル通信方式の開発

20世紀はじめの通信技術の課題は、より遠くへ、より速く、より大量に情報を送ることにありました。

電話通信の分野では、アメリカ・コロンビア大学のビューピン教授が開発した「装荷ケーブル方式」が世界の主流でした。これは、電流の減衰を防ぐため電話ケーブルの途中に装荷コイルを挿入するものでしたが、音声不明瞭、1回線でも1通話しかできず不経済であるなど、さまざまな欠点がありました。

#### ■ 松前 信子

まつまえ のぶこ

1904(明治37)年4月7日

鹿児島県出身

～1990(平成2)年8月22日



鹿児島で旧島津藩に代々仕えた医家に生まれる。1926年5月1日、松前重義と結婚、内助の功に努めた。二人で内村鑑三の聖書研究会に通い、内村の死後は夫とともに自宅で「聖書研究会(教育研究会)」を開催、篠原登、大久保真太郎らと参加した。この研究会が望星学塾に発展し、東海大学の母胎となる。戦中・戦後の苦難の時期には松前と学園を陰で支え、学生の面倒を見るなど、「学園の母」としてその発展に貢献した。

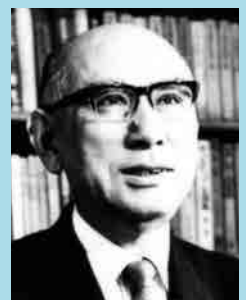
#### ■ 篠原 登

しのはら のぼる

1904(明治37)年11月27日

静岡県出身

～1984(昭和59)年10月16日



逋信官僚、科学者。初代科学技術事務次官。逋信官僚として松前の4年後輩で、常に松前を支えた。松前とともに画期的な「無装荷ケーブル通信方式」を発明。衆議院議員でもあった松前らの運動によって設置された科学技術庁の初代事務次官を務めた。また、上皇明仁陛下が皇太子のころ、科学技術についてご進講していた。学園においては常務理事・副理事長、東海大学工学部長・事務局長・大学院運営委員長や学長などを歴任。

そこで松前は、通信省で後輩の**【篠原登】**らとの研究成果をもとに、装荷コイルを使わない新たな通信方式を開発します。長距離ケーブルの途中に増幅器を設置して電流を増幅させ、高周波の電流に音声を乗せて送るこの新方式は、1回線で複数の通話——多重通信を可能とする経済的なものでした。装荷ケーブル方式の欠点を一気に解決したこの新方式こそ、世界的にも有名な「無装荷ケーブル通信方式」です。この技術の国産化を後押しした上司が通信省工務局長の**【梶井剛】**でした。

1933（昭和8）年春、無装荷ケーブルの実用化に向け実験に取り組んでいる最中の松前に、1年間のドイツ留学の命が下ります。無装荷ケーブルの実用化のめどが付き次第、教育事業に転身するつもりでいた松前は、一旦は断りましたが、梶井の配慮でデンマークの視察が認められたため、留学を受け入れることとなります。念願のデンマークで国民高等学校を訪問するとともに、欧米各地の視察を行い、幅広い知見を得ることができました。この時、フランス・パリで邂逅したのが**【足利惇氏】**です。

松前の帰国後、国と民間企業が協力する国産プロジェクト研究によって無装荷ケーブルの実用化が進み、1939（昭和14）年に日本と中国間、約2,700kmが結ばれました。その後、この通信方式は世界の主流となり、今日の情報化時代を開くきっかけとなったのです。

## ■ 望星学塾の開設

内村鑑三が1930（昭和5）年に逝去した後、松前

### ■ 梶井 剛

かじい たけし

1887（明治20）年7月20日

宮城県出身

～1976（昭和51）年10月9日



通信官僚、実業家。日本電気（NEC）社長や日本電信電話公社初代総裁を歴任。松前や篠原の通信官僚時代の直属の上司。無装荷ケーブル通信方式の開発時は、通信技術の国産化を推進し、研究の助力をした。松前のドイツ留学も梶井の推薦によるもの。望星学塾創立では顧問として名を連ね、技術教育・工業教育の改善を唱えて学園創立構想に参加。東海大学初代学長、学校法人東海大学理事などとしてその発展に貢献した。



望星学塾で塾生とともに。前列左から2人目が松前重義塾主、1人おいて篠原登塾監

は妻信子や、松前の理想に共鳴する同僚で友人の篠原登、**【大久保真太郎】**など数人の同志とともに自宅に集まり、教育や聖書の研究会を開いて、シュバイツァーやペスタロッチなどの人生・思想やキリスト教を研究していました。

そして松前は、無装荷ケーブル通信方式の発明により、電気学会から「浅野博士奨学祝金」を受けると、これを基金の一部として東京・武蔵野の地に記念館を建築。1936（昭和11）年に望星学塾を開設し、かねてから望んでいた教育事業を開始しました。

望星学塾での活動は、デンマークの国民高等学校の教育を範としながら、対話を重視し、ものの見方・考え方を養い、身体を鍛え、人生に情熱と生き甲斐を与える教育をめざすものでした。聖書の研究を中心として日本や世界の将来を論じ合う、規模は小さくとも理想は大きく、活気ある学習の場——。この私塾が今日の学校法人東海大学の母胎となったのです。

### ■ 足利 惇氏

あしかが あつうじ

1901（明治34）年5月9日

東京府出身

～1983（昭和58）年11月2日



インド・ペルシャ学者。関東公方系足利氏で旧喜連川藩主足利子爵家当主。松前がドイツ留学後に立ち寄ったパリで邂逅、松前に同行し通訳案内を務める間柄に。旧制東海大学設立に際して文系図書の整備に尽力。文系教員も足利が中心となって京都大学などから集め、学園の理念「文理融合」の片翼を担った。1948年に学園の理事に就任。京都大学を退官した1965年から文学部長、1967年に学長に就任。学園紛争の鎮静にも努めた。



## 第3章 技術者運動と学園創設

### ■ 技術者運動への参加

戦前・戦中の日本の社会は指導者として法学部出身者を最優先する風潮が根強くありました。そのため、各省庁で技術者の地位向上を訴える技術者運動が展開されました。通信省内では工務局の梶井剛や松前などが中心を担ったこの運動に、同省経理局から参加していたのが**山田守**です。通信省内の技術者運動は通信技友会を結成し、その後、各省の技術者運動の流れと統合し六省技術者協議会となり、さらに日本技術協会へと発展しました。そこで指導的立場にあったのが内務省土木局の技師、**宮本武之輔**です。内務省の土木技術官、直木倫太郎は著作で「人格の向上があって初めて技術は有用なものになる」と唱え、宮本をはじめとする技術者運動の担い手たちに影響を与えました。



技術者運動講演会で開会の辞を述べる松前重義（1940年）



航空科学専門学校第1回入学式（1943年4月8日）

この考えは、宮本、梶井、松前たちにより「理科系統の学生に法、経の授業科目を、文科系統の学生に科学及技術の授業科目を追加し以て総合教育の実を挙げること」（日本技術協会「総合国防技術政策実施綱領」）など技術教育・工業教育に関する意見として反映され、文理融合という東海大学の教育理念の一つになっていきます。

### ■ 学園の創設

国家の正常な発展のためには文科系と理科系の相互理解が不可欠であるとの思いを強くし、具現化したのが本学の創設計画です。1941（昭和16）年2月22日、新聞各紙において、宮本武之輔、梶井剛、松前を発起人とする国防理工科大学の設立計画が報じられました。この計画の第1期が航空科学専門学校の設置です。1942（昭和17）年12月8日に財団法人国防理工学園設立と航空科学専門学校開設が認可され、学園が創立

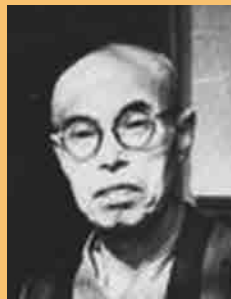
#### ■ 大久保 眞太郎

おおくぼ しんたろう

1894(明治27)年10月20日

北海道出身

～1965(昭和40)年3月8日



通信技師、教育者。英世学園理事。東京府立第四中学校卒業後、応召し近衛歩兵第一連隊に配属。除隊後、通信省に勤務し松前と懇意になる。松前が自宅で開いた聖書研究会に参加し、キリスト教に傾倒。望星学塾開塾後は実務面を担った。松前が戦後、農村青年の教育によって疲弊した日本を復興させようと設立した財団法人英世学園の構想に共鳴、その理事に就任し、開校準備や運営を手掛けた。松前は「いつも謙虚な縁の下の世話役」と感謝を述べている。

#### ■ 山田 守

やまだ まもる

1894(明治27)年4月19日

岐阜県出身

～1966(昭和41)年6月13日



建築家。技術官僚。通信省営繕課に所属し多くの電信局・電話局・病院を設計した。技術者の地位向上運動で松前と出会う。学園創立時よりそのすべての建築設計を担い、湘南キャンパスのグランドデザイン・初期建物の設計も手掛けた。1951年に学校法人東海大学理事および東海大学工学部建設工学科主任教授に就任。同学科教授陣は山田が集めた。日本武道館や京都タワービルなど個性的な作品でも知られる。

されます。翌1943（昭和18）年4月8日に航空科学専門学校が静岡県清水市（現静岡市清水区）で開校しました。翌月には【牧野不二雄】（物理科長）らが赴任し、航空科学専門学校の教育体制が整っていきました。翌年には東京に電波科学専門学校も開校しました。

1941（昭和16）年から始まったアジア太平洋戦争によって国内情勢が逼迫する中、危機感を募らせていた松前は、我が国の生産力調査を行い、その問題点を明らかにした上で早期の和平工作を唱え、東條英機内閣を強く批判します。1944（昭和19）年7月、松前は懲罰召集を受け二等兵として戦地に送られてしまいました。これにより、私塾であった望星学塾の活動は休止を余儀なくされます。松前の召集から2カ月半



勤労働員を前に、三保海岸で語り合う航空科学専門学校物理科の牧野不二雄科長（中央）と生徒たち

後、学園は財団法人電気通信工学校を吸収合併し、規模を拡大していきました。

## 第4章 学園の苦難

### ■ 学園解散の危機

戦後の松前の歩む道は多難でした。1946（昭和21）年、学園は松前が念願していた文理融合を理念とする旧制東海大学を開学します。松前は、「ここようやく、私の夢が実現した。私は嬉しくて、たまらなかった」と述べています。しかしその矢先、松前は日本を占領していた連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）から、公職・教職追放の指定を受け、東海大学の運営に関わることができなくなります。戦時中に大政翼賛会の活動に関わっていたことがその理由でした。ここに至り学園は、戦後の価値観の変化や社会的・経済的・思想

的混乱のなかで松前を失い、さらに学園理事長で学長の梶井剛も追放の指定を受け、二本の主柱を失います。戦後の劣悪な経済状況に加え、学制改革によって他に新制大学が多数発足したことで東海大学の学生数は激



駒越校舎本館前で、旧制東海大学の教授陣。前列中央が松前、その右が篠原登

### ■ 宮本 武之輔

みやもと たけのすけ

1892（明治25）年1月5日

愛媛県出身

～1941（昭和16）年12月24日



内務官僚、土木技師。興亜院技術部長や企画院（戦時期の物資動員・重要政策の企画立案機関）次長を歴任。文官に比べ冷遇されていた技術官僚たちの待遇改善をめざす「技術者運動」の指導的役割を果たす。宮本らが創立した日本技術協会に松前たちの活動が合流。同協会が1940年に政府に具申した「総合国防技術政策実施綱領」が、1941年2月公表の学園創立構想につながった。宮本は同年末に逝去、松前が遺志を継承した。

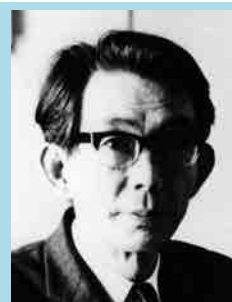
### ■ 牧野 不二雄

まきの ふじお

1905（明治38）年7月11日

東京府出身

～1992（平成3）年1月13日



教育者、数学者。松前の4歳年下で、家族ぐるみの付き合いをしていた。松前と同じ白川小学校、熊本中学校（現熊本高等学校）、東北帝国大学を卒業。日本大学工学部講師を務めていた1943年4月、松前から突然の電話で、航空科学専門学校教授の就任依頼を受ける。同校開校以来、一貫して本学園の教員を務め、献身的に働き松前と苦難をともにした。旧制東海大学理工学部長や工学部長、学務局長、学長、理事、評議員などを歴任。



減。教職員は給与の遅配もあり一人また一人と去っていき、学園は解散の危機に瀕するほどになりました。

解散間近の報が伝わると、松前の東北帝国大学時代の恩師 **【抜山平一】** は、「何とかして解散を中止して、創立者松前の追放解除後、松前の手によって再建せしめなければならない。もし解散をするにしても松前の手によって解散せしめるべきである。その他の人の手によって解散することは穏当でない。」と申し入れました。抜山の言葉は解散回避の機運を盛り上げ、松前の古くからの友人である **【濱田成徳】** が、1948（昭和23）年に理事長・学長を引き受け、松前の復帰まで学園の存続を図りました。

東海大学も新制大学に移行するため、濱田のほか、篠原登、牧野不二雄などが尽力します。1950（昭和25）年ようやく認可が下り、文学部と工学部を有する新制東海大学が正式に誕生します。松前の理想に共鳴する多くの人々によって大学は支えられ、再建への努力が続けられました。



新制東海大学が発足、駒越本部校舎

## ■ 東京移転

1951（昭和26）年、教職追放から解除（公職追放解除は前年）された松前は直ちに学園に復帰。翌年には濱田成徳から理事長・学長を引き継いで、学園再建のために山田守らと将来計画について相談し、東京移転の決断をします。大学が静岡・清水にあっては、地理的条件から教員の確保などにさまざまな制約がかかり、学園発展には限界があるという判断でした。

清水の駒越にあった校舎を静岡県へ売却しましたが、借金返済後の残金では東京に新たな土地、建物を取得するのは至難の業でした。移転先探しは困難を極めました。渋谷区代々木富ヶ谷にあり、同じく経営難であった名教高等学校の経営母体・名教学園と本学が合併する形をとり、同地を買収することで解決を図ります。その時には梶井剛が現地を視察して、最終的に移転先を現在の代々木キャンパスに決定しました。1955（昭和30）年、東海大学は建学の地・清水から東京・代々木の地に、まずは工学部が移転しました。



1956年の代々木校舎。中央の1号館と、名教学園時代から残る木造校舎

### ■ 抜山 平一

ぬきやま へいいち

1889(明治22)年9月23日

東京府出身

～1965(昭和40)年8月18日



電気工学者、工学博士。東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業後、東北帝国大学講師に。1919年同大学教授に就任し、以後、工学部長、附属電気通信研究所初代所長を歴任した。戦後は電波管理委員会委員のほか電波技術審議会長、電気学会会長などの要職を務めた。松前の卒業研究を指導。厳格な姿勢で松前を徹底的に鍛えた。一方で松前は、抜山の家族と親しくなり、夫人から非常に可愛がられたと述懐している。

### ■ 濱田 成徳

はまだ しげのり

1900(明治33)年9月21日

群馬県出身

～1989(平成元)年7月1日



科学者、教育者、官僚。東京電気株式会社（現株式会社東芝）理事、NHK経営委員会委員長など公職を多数歴任。東京女子大学理事長も務めた。内村鑑三の「聖書研究会」参加をきっかけに松前と出会う。松前が公職・教職追放で不在となった学園の危機的状況下に、理事長や東海大学学長を務め、その存続を図った。松前復帰後は直ちに身を引き、理事長職を譲った。その後、再び学園理事に就任し、逝去まで発展に尽力した。

## 第5章 学園の再建と拡充

### ■ 先駆的な教育研究

代々木キャンパスでは、山田守が新たな校舎の設計を行いました。1号館、2号館の建設は資金面で大変苦勞し、山田も奔走した結果、各所への借り入れ、工事費の立て替え、学校債の発行で賄われました。2号館の完成した1958（昭和33）年には文学部も移転し、東海大学の東京移転が完了します。移転後の学園は、松前と同志たちの獅子奮迅の活躍で再建を果たします。

本学の教育の中核をなす講義として位置づけられている「現代文明論」も始められ、原子力の平和利用を掲げて原子力技術者を養成する工学部応用理学科原子力工学専攻を新設、教育の機会均等をめざしてFM実験局（のちのFM東海、現在のエフエム東京）を開設するなど、先駆的な教育研究を行いました。FM放送の免許認可には、当時郵政省電波管理局長であった濱田成徳の助力もありました。

### ■ 学園の拡充

日本は高度経済成長期に入り、進学率が増加してきました。東海大学でも学部や学生数が急増し、代々木キャンパスでは手狭になり、新たなキャンパスの必要性に迫られました。松前と山田守が候補地の視察を行い、現在の湘南キャンパスの地を選定します。松前



1958年竣工の代々木校舎2号館。塔屋にFM放送用アンテナが立つ



1962年4月に海洋学部が開設、同年5月には「東海大学丸」が就航した。この地を東海大学の永遠の礎となる新しいキャンパスとすべく、施設を整え、総合大学としての機構の充実を図りました。山田は、松前の構想を具現化すべく、キャンパスのグランドデザインと建物の設計を担っただけでなく、土地の確保、建築資材や資金の調達、役所との交渉など多岐にわたり奔走したのです。1963（昭和38）年4月、湘南キャンパス開設。ここが学園の発展の起点、拡充の拠点となりました。

さらに1962（昭和37）年に、静岡・清水に日本で唯一の学部である海洋学部を開設し、建学の地に里帰りします。1965（昭和40）年になると、科学技術庁次長など科学技術関係の公職を歴任していた篠原登が東海大学事務局長に就任し、また京都大学を退官した足利惇氏が東海大学文学部長に就任するなど、松前の同志たちが本格的に学園・大学運営に携われるようになりました。篠原と足利の学園・大学運営への復帰・参加は、拡充を続ける学園と松前にとって大きな援軍となったのです。

各地に教育機関を開設し、総合大学としての陣容を整えて規模を拡大する学園は、1967（昭和42）年には、東海大学学長に足利惇氏が就任して、松前は総長・理事長、篠原登が副理事長として学園全体を統括することになりました。1975（昭和50）年には篠原が学長に就任、さらに1978（昭和53）年には牧野不二雄が学長に就任しました。その間、学園紛争など大きな嵐が吹き荒れることもありましたが、松前と同志たちは困難を乗り越え、学園をさらに発展・拡充させていったのです。

◎この冊子は学校法人東海大学学園史資料センターがWebサイト上に開設している「学園史デジタル展示室」<https://www.tokai-archives.com/exhibition/>にて、2021年11月1日より開催している企画展「創業者松前重義と建学の同志たち」の内容を再構成したものです。

### 創業者松前重義と建学の同志たち

2022年3月31日発行

編集・発行 学校法人東海大学学園史資料センター  
印刷 株式会社東海教育研究所



学園史デジタル展示室

学校法人東海大学 学園史資料センター

〒259-1292

神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学湘南キャンパス5号館2階

電話 0463-63-4700

E-Mail : shiryo-center@tsc.u-tokai.ac.jp

URL : <http://www.pr.tokai.ac.jp/gsc/>